

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

旭川医科大学研究フォーラム (2014.02) 14巻1号:113~116.

学会の動向
第19回 日本看護診断学会学術大会を終えて

原口 眞紀子、升田 由美子、上田 順子

学界の動向

第19回 日本看護診断学会学術大会を終えて

原 口 眞紀子* 升 田 由美子** 上 田 順 子***

平成25年6月22日(土)および23日(日)の2日間、旭川市民文化会館、旭川グランドホテルにおいて、旭川医科大学病院上田看護部長を大会長とし、第19回日本看護診断学会学術大会を開催いたしました。

学会のテーマは「チーム医療と看護診断」で、大会長講演、特別講演2題、教育講演4題、シンポジウム2題、学習コーナー、ミニ講演会「ひろば」を企画しました。その他、交流セッションと事例セッションを開催し、一般演題は、口演28演題、示説26演題が発表されました。本学術大会が北海道で開催されるのは初めてでしたが、全国から1176名の看護師、教員、看護学生の方々に参加いただき、盛況のうちに終えることができました。開催にあたり、ご支援ご協力をいただきました皆様に、お礼を申し上げますとともに、結果についてご報告させていただきます。

I. 第19回日本看護診断学会学術大会の取り組みと結果

日本看護診断学会は、適切な看護を行うために看護診断ならびに介入・成果に関する研究・開発・検証・普及ならびに会員相互の交流を推進し、同時に看護診断に関する国際的な情報交換や交流を行うことによって、看護の進歩向上に貢献することを目的としています。

1995年に第1回学術大会を、松木光子大会長が名古屋で開催しました。その後、1998年に第4回学術大会を菊池登喜子大会長が仙台で、2002年に第8回学術大会を新道幸恵大会長が青森で開催し、東北・北海道での開催は11年ぶり、北海道では初の開催でした。

2011年5月に、上田順子看護部長が日本看護診断学会理事長小田正枝先生より第19回日本看護診断学会学術大会長の委嘱を受け、開催地を北海道旭川市としました。学会のテーマは、「チーム医療と看護診断」としました。上田順子看護部長は、学会抄録の巻頭言に「複雑・高度化する医療の現場では、多職種の専門性を尊重した協働・連携するチーム医療は不可欠です。看護職は何をするのか、看護の専門性とは何かを可視化し、多職種や社会に発信することが必要です。チーム医療の推進にむけて看護職への期待が高まっている今こそ、診断の根拠が明確で、共通用語となる看護診断の意義を発信するチャンスと考えます。」と学会のテーマについて述べています。

1. 6月22日(土)：大会1日目

1) 旭川市民文化会館

メイン会場である大ホールでは、大会長講演、特別講演I、教育講演I・II、シンポジウムIが開催されました。



会場：旭川市民文化会館

*旭川医科大学 看護部 副看護部長 **旭川医科大学 看護学科 教授 ***旭川医科大学 看護部 看護部長



教育講演Ⅰ 細田満和子氏

大会長講演は「挑む！チーム医療に生かす看護診断」をテーマに、上田順子看護部長がご講演されました。1992年に旭川医科大学病院で看護診断を導入してからの、看護診断の活用と定着への取り組み、チーム医療で看護診断を活用することの意義について臨床での事例を混じえてお話し頂きました。

特別講演Ⅰは「看護診断開発の国際化」をテーマに、NANDA-International 次期理事長 上鶴重美氏に、看護診断開発への責任、既存の看護診断の見直し、世界に通じる専門用語へ、診断概念を特定する意義、グローバル展開と組織・人材開発についてご講演頂きました。

教育講演Ⅰは「チーム医療とは何か」をテーマに、星槎大学共生科学部教授 細田満和子氏にご講演頂きました。チーム医療は「専門性志向」「患者志向」「職種構成志向」「協働志向」の4つに分類されること、「チーム医療」は看護診断に活かすものであり、看護診断は「チーム医療」に活かせるものであることについて述べられていました。

教育講演Ⅱは「チーム医療の将来像」をテーマに、札幌市立大学看護学部副学長・看護学部長 中村恵子



教育講演Ⅱ座長 升田由美子氏



シンポジウムⅠ

氏に、チーム医療のありかた、厚生労働省の「チーム医療推進会議」から見えるチーム医療の将来像についてご講演頂きました。

シンポジウムⅠは、「看護診断をいかに個別性のある看護実践につなげるか」をテーマに臨床の立場、看護教育の立場から4名のシンポジストに発言して頂きました。臨床の立場からは、札幌医科大学附属病院看護副部長 佐々木純子氏に「看護診断教育の院内研修の現状と個別的な看護実践に向けて」、旭川医科大学病院看護師長 金田豊子氏に「看護診断のシステム化と定着に向けた取り組みに」について発表して頂きました。看護教育の立場からは、聖隷クリストファー大学看護学部教授 渡邊順子氏に「看護学士課程における看護過程と看護診断のカリキュラムデザイン」、日本赤十字北海道看護大学看護学部教授 河原田榮子氏に「看護基礎教育における看護診断を取り入れた講義・演習・実習の実際」について発表して頂きました。

2) 旭川グランドホテル

こちらの会場では研究助成報告、交流セッション、事例セッション、学習コーナー、ミニ講演会が開催されました。

研究助成報告は、「精神看護領域における看護診断導入に関する全国実態調査 平成19年度と24年度の比較」について、帝京大学医療技術学部教授 白石壽美子氏より発表されました。

日本看護診断学会の理事が企画した3つの交流セッション、2つの事例セッションが開催されました。いずれも、多くの参加者が集い学習を深め、意見交換の場となりました。



学習コーナー



事例セッション

学習コーナーは、看護診断についてのちょっとした疑問・質問について、語り合い交流を深めることを目的に企画しました。講師は日本看護診断学会の江川隆子理事に依頼し、「今さらきけない看護診断のはなし」というテーマで開催し、100名を超える大勢の方に参加して頂きました。江川理事は、看護上の問題の範疇、看護診断と看護ケアの考え方、医療問題と看護問題について述べられ、看護診断の基礎を学ぶ場となりました。

ミニ講演会は、北海道旭川という地域の特色をいかした「ひろば1」「ひろば2」を企画しました。「ひろば1」は「三浦綾子、道ありき」のテーマで、三浦綾子記念文学館特別研究員 森下辰衛氏よりご講演頂きました。「ひろば2」は「旭山動物園 いのちを伝える」のテーマで、旭山動物園園長 坂東元氏にご講演頂きました。両者ともに、いのちや人の生き方、そして医療につながる内容であり、大変好評でした。

2. 6月23日(日): 大会2日目

1) 旭川市民文化会館

メイン会場である大ホールでは、特別講演Ⅱ、教育講演Ⅲ、教育講演Ⅳ、シンポジウムⅡが開催されました。

特別講演Ⅱは「米国のチーム医療と看護診断」をテーマに、アイオワ大学 阿部典子氏にご講演頂きました。米国におけるチーム医療の動向、チーム医療における看護師の役割と看護診断について述べられ、看護はその専門性をどのように発揮すべきか改めて考えさせられました。

教育講演Ⅲは「クリティカルケア領域のチーム医療と看護診断」をテーマに、北里大学大学院教授 黒田



特別講演Ⅱ 阿部典子氏

裕子氏にご講演頂きました。

教育講演Ⅳは「レジリエンスを学ぶ」をテーマに、三育学院大学名誉教授 本郷久美子氏にご講演頂き、レジリエンスの語源と使用法、レジリエンスという特性について学ぶことができました。

シンポジウムⅡは「チーム医療の中でどのように看護の専門性を発揮するか」というテーマで、4名のシンポジストに発表して頂きました。看護部の立場から東北公済病院看護部次長 熊谷恒子氏に「看護診断をどのように浸透させ、多職種と看護診断を共有しているか」について発表していただき、地域看護専門看護師の立場から淀川キリスト教病院 三輪恭子氏に「退院支援・地域連携における多職種協働の実際」、皮膚排泄ケア認定看護師の立場から旭川医科大学病院看護師長 日野岡蘭子氏に「チーム医療の中でどのように看護の専門性を発揮するか」について発表して頂きました。また、医師の立場から旭川医科大学病院血管外科 内田 恒氏に「虚血肢治療におけるチーム医療の取り組み」発表して頂き、薬剤師の立場から京都大学医学部附属病院 薬剤部長 松原和夫氏に指定発言して頂きました。チームカンファレンスなどで、多職種



シンポジウムⅡ



一般演題発表：口演

が看護診断を参考にしている例もあり、多職種と協働していく中で、看護の専門性や看護診断の意味を伝えることの重要性を再認識することができました。

2) 旭川グランドホテル

こちらの会場では、5つの交流セッション、事例セッション、2つの共催セミナーが開催されました。

事例セッションは、看護診断には不可欠であるアセスメントについて初心者の方達も学習できることを目的に、大会企画として開催しました。講師は上鶴重美氏、河原田榮子氏に担当して頂き、180名の方々が参加され、熱気にあふれたセッションとなりました。

3. 一般演題の発表

一般演題の発表は、大会2日間を通して旭川市民文化会館で行いました。「看護診断の実践・評価」「特定

領域の看護診断」「教育」「電子カルテ・教育」などに関する口演 28 演題、示説 26 演題が発表されました。臨床や教育の現場から多数の方にご参加頂き、多くの意見交換の場となりました。

Ⅱ. おわりに

今回、北海道では初の開催で、旭川医科大学病院看護部でも初めての学会開催でした。大会長ならびに運営スタッフ一同、不安な思いを抱えながら学会当日を迎えましたが、全国から多くの方々に参加して頂き、看護診断を通じて交流を深め、学びの場とすることが出来ました。最後に、第19回日本看護診断学会学術大会を開催するあたり、運営およびご指導を承りました日本看護診断学会理事長の小田正枝先生、及び企画委員の皆様、ご協力いただきました本学の病院および看護学科の皆様に深く感謝いたします。

